

年号：1957年

月日：7月25日～28日

災害名：諫早豪雨（諫早大水害）の概要

本明川位置図



出典：国土地理院

【諫早豪雨（諫早大水害）の概要】

- ・昭和 32 年 7 月 23 日に九州南部まで南下していた梅雨前線が 24 日から 25 日早朝にかけて北上を始め、次第に活動を活発にしながら一旦長崎県北部まで北上し、さらに南下して諫早、熊本、延岡を結ぶ線に達し、停滞した。
- ・その上南西方向から温風が突入し、その先端が諫早上空に達し、諫早市が豪雨に見舞われ、1970 箇所で大崩れが起きるなど（長崎県全体）甚大な被害が生じた。

▼諫早豪雨（諫早大水害）による諫早市の被災状況

死者、行方不明者	死者 494 名、行方不明者 45 名
負傷者	1,476 名
流失及び全半壊戸数	1,302 戸
床上浸水	2,734 戸
床下浸水	675 戸
田畑の流失・埋没、崩壊	805 町

出典：本明川水系河川整備計画（変更）（平成 28 年 3 月）[国土交通省 九州地方整備局 長崎県]

【諫早豪雨（諫早大水害）の被災状況】



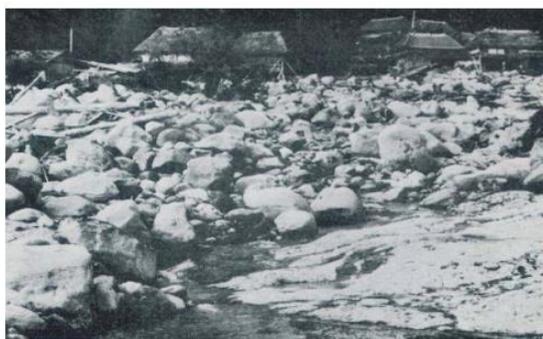
▲流木が堆積した眼鏡橋



▲被災した諫早市街地



▲本明川上流沿川（湯野尾町）の流失した家屋



▲湯野尾町中島付近の流失した水田



▲八天町の倒壊した家屋群



▲浸水した小野島地区

出典：本明川水系河川整備計画（変更）（平成 28 年 3 月）[国土交通省 九州地方整備局 長崎県]

【諫早豪雨（諫早大水害）の被災状況】



▲眼鏡橋両岸の流失状況



▲7月26日朝の小野島新地付近



▲7月26日朝の小野島町付近



▲逃げ遅れた人の救出



▲孤立した屋根上から助けを求める人



▲空から見た多良岳の山崩れあと



▲激流に削りとられた本明川上流



▲流失した本野小学校あと



▲本野大林付近の山津波のあと



出典：長崎工事 五十年のあゆみ[建設省 長崎工事事務所（昭和57年3月）]

① “あの日”を時間で追う

諫早大水害は、典型的な梅雨末期型の豪雨によるものとされている。
7月中旬は雨も降らず、梅雨も明けるかと思われる中、21日頃から小雨が降り続き、24日には徐々に雨が激しさを増し、25日を迎えることに。繰り返し発令された大雨警報、そして避難命令…。あの運命の日までの状況を時間で追ってみた。

ドキュメント「1957.7.25」

1957.7.21～

- 梅雨前線が九州まで南下
- 毎日のように、顕著な雷雨を長崎県内各地で観測。
- 諫早地区でも小雨が降り続く。

1957.7.24

- 梅雨前線が夜から九州を北上
- 雨がさらに強くなり、夜には特に激しい降雨に。

1957.7.25

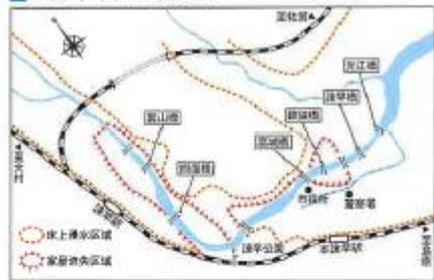
- 未明以降
 - 午前中
 - 午後1時～2時
 - 午後2時
 - 午後2時5分
 - 午後3時30分
 - 午後5時頃
 - 午後6時頃
 - 午後6時50分
 - 午後7時30分
 - 午後8時頃
 - 午後9時頃
 - 午後9時10分
 - 午後9時30分
 - 午後9時50分
 - 午後10時9分
 - 午後10時20分頃
 - 午後11時15分
- 梅雨前線が九州中部周辺まで北上。
 - 諫早地区は時間雨量10ミリ前後で少雨の傾向。
 - 状況は一転。旧諫早町の西部では時間雨量が160ミリと猛烈な大雨に。
 - 雨がだんだん激しくなる。
 - 大雨警報発令
 - 本明川の水位は、諫早市下で4mに達し危険水位3m20を突破。旭町周辺で床下浸水被害が徐々に発生。本明川沿川では避難準備の動きも。光江橋は通行止め。
 - 本明川氾濫。旭町、本町、仲沖町、八天町で大規模浸水発生。警察、消防団が住民の救助に。
 - 雨はいったん小康状態に。本明川の水位も下降。その後、激しい雷雨に気象変化。
 - 1回目の避難命令のサイレン。高城町、本町周辺で家屋浸水。急激な増水により市内各地で家屋損壊・流失が続発。
 - 2回目の避難命令のサイレン。
 - 本明川上流域で山津波発生。押し流された土砂・流木等が漂流となって流下し、本野地区では壊滅的な被害が発生。
 - 永福町駅前周辺で家屋流失。諫早市役所1階浸水。
 - 大雨警報発令。
 - 3回目の避難命令のサイレン。
 - 上宇戸橋が流失。
 - 電話不通。さらに大規模停電発生。
 - 本明川の水位がわずか10分間に約2m上昇。前後して、土砂流と雨水が含浸した濁流が裏山橋、西面橋の一部を次々と破壊。その後、断崖崩れを急襲。流れてきた瓦礫や土石が雨鉄橋で堰き止められたことで、兩岸の高城町、八天町へ流れを変えて流下。被害を拡大させた。
 - 光江橋流失。

1957.7.26

- 午前0時30分
- 本町一帯で減水に転じる。

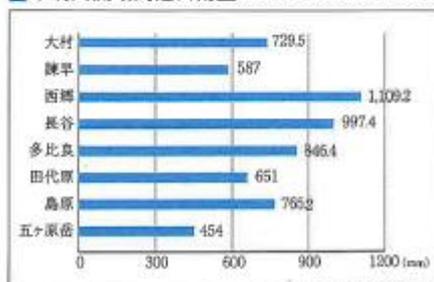


■旧諫早市内の被災図



※出典：(公社)日本気象学会機関誌「天気」

■本明川流域周辺日雨量(昭和32年7月25日9時～26日9時)



※出典：(公社)日本気象学会機関誌「天気」

▲被災時の時系列等

出典：諫早大水害 60年写真集・体験者談[国土交通省長崎河川国道事務所 諫早市(2017年7月)]

【昭和32年7月本明川洪水痕跡標：長崎県諫早市高城町】

- ・諫早豪雨（諫早大水害）によって諫早市内の「高城公園」沿いに「本明川洪水痕跡標」と「いのりと書かれた乙女像」が建っている。並べて設置されている陶板には、水害被災写真や被災状況に加え、被災者による当時の状況が記録されている。



▲本明川洪水痕跡標の位置（長崎県諫早市高城町）



▲本明川洪水痕跡標（左）と乙女像（右）

令和3年2月22日撮影



令和3年2月22日撮影

■諫早大水害陶板より「15歳の思い出」山村和枝

その夜、私は夢中になって本を読んでいた。すると足の不自由な父が、「はき物が庭を流れて行きよっぞ！」と言ったので、みんなびっくりして外を見た。「家にいると危い」と母が言い、近くのたきぎを置いてある小屋に逃げることにした。

母が父を背負い私が仏様をもって、稲光りを頼りに妹と弟を連れ、はだしで家を出た。石ころだらけの山道、水はひざまである。妹は歩けないと言って泣く。母が私の名を呼ぶのでもどって見ると、父の重みに耐え兼ねて地面に降ろしている。父は水の中を猫のように、はいながら進む。1m ぐらいの石がきを私と妹が上から手を引き、母が下から押し上げた時は、うれしかった。

父と母を途中の竹山に残し、私たちはたきぎ小屋にしばらくいたが、小屋が崩れだしたので、また30分ほど歩いて近所の家に着き、夜を明かした。道の途中で何回も、仏様にお参りをした。

私たちは父母が心配でたまらなかった。父母は私たちが流されないかと、とても心配したそうだ。

隣のおばさんの家では、母子三人が流された。かわいそうでたまらなかった。

【昭和32年7月水害復興記念碑：長崎県諫早市永昌東町】

- ・諫早豪雨（諫早大水害）によって諫早市内の「駅前公園」沿いに「水害復興記念碑」が建っている。
- ・この記念碑は、後世に憂いなき事を希って水神を祀り水神を祀り水害30周年を記念するとともに、水害による犠牲者への冥福を祈るものである。



▲水害復興記念碑の位置（長崎県諫早市永昌東町）



▲水害復興記念碑

令和3年2月22日撮影

■水害復興記念碑碑文

仲通り低地帯は、昭和32年7月25日諫早大水害に多くの人命と家財を失い、爾来例年水禍に脅かされ、茲に地元民は共に語り共に団結して、低地帯の悩みを解決し茲に其の完成を見、後世に憂いなき事を希って水神を祀り水害30周年を記念し（昭和62年）復興碑を建立、犠牲者への冥福を祈るものである。

資料：川の碑（川の碑編集委員会 編 1997.3.1）

【昭和32年7月水難殉難者供養塔・江川ミキ先生之像：長崎県諫早市城見町】

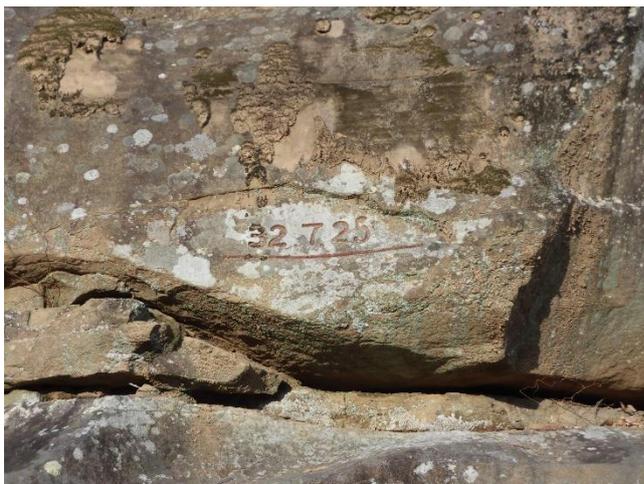
- ・諫早市内の「高城橋」のもとに「水難殉難者供養塔」が建っている。
- ・また、諫早市連合婦人会の初代会長であり、女性の社会参加の促進に尽力された方で、昭和32年の諫早大水害による身元引受人のない殉難者の為の納骨堂の建立にも尽力された江川ミキ先生を称える像が設置されている。



▲水難殉難者供養塔の位置（長崎県諫早市城見町）



▲水難殉難者供養塔



▲慶巖寺水位表

令和3年2月22日撮影



▲江川ミキ先生之像



▲江川ミキ先生之像に書かれた碑文

令和3年2月22日撮影

■江川ミキ先生之像碑文

江川ミキ先生は、明治三十年、諫早町に生まれ、戦後における女性の指導者として、初代諫早市連合婦人会会長に就任され、地域と一体となった婦人会活動による生活改善運動を積極的に推進され、また、婦人学校を通じて女性の社会参加の促進に尽力されるとともに、婦人会による奨学金制度の創設、昭和三十二年の諫早大水害による身元引受人のない殉難者のための納骨堂の建立に努力されるなど、二十五年の永きにわたり諫早市連合婦人会のゆるぎない発展の基礎づくりと、女性の地位の向上に大きく貢献され、平成二年諫早市名誉市民の称号を受けられました。

ここに先生の功績を称え、永く後世に伝えるため、本像を建立する。

(平成二十一年十一月 諫早市連合婦人会)

【昭和32年7月諫早大水害洪水水位標：長崎県諫早市八坂町】

- ・昭和32年7月25日の諫早豪雨（諫早大水害）の洪水痕跡を印すものである。（平成19年7月20日建立）



▲水害復興記念碑の位置（長崎県諫早市八坂町）



令和3年2月22日撮影

▲諫早大水害洪水水位標

▼本明川水系既往洪水の概要

洪水発生年月	洪水被害の概要	
寛永末年 (年代不詳)	1624年～ 1643年	本明川大洪水のため人家、耕地に被害。馬の鞍坂(天満町、円清田井原東側の丘)で手を洗うことができたと伝えられている。慶厳寺に溺死者のための供養碑がある。
元禄12年8月	1699年	本明川大洪水のため、溺死者487人。その他人家の流失、田畑の荒廃等の被害甚大。損失3,930石(この水害の供養のため、領主諫早茂晴が本明川の富川峡の巨岩に五百羅漢を作らせた。宝永6年(1709年)完成)
正徳元年	1711年	慶厳寺に溺死者供養塔があるが、詳細は不明。
文化7年6月	1810年	不意の大洪水で本明川唯一の石橋が流失。元禄12年の洪水と同じ程度と想定される。(この洪水を契機に眼鏡橋がつくれる。天保9年(1838年)に起工、天保10年に完成した。)
文化9年6月	1812年	大洪水により、市中の最高床上5尺5寸。流家、半倒壊多数。橋流失、堤防決壊、田畑水損等の被害甚大。
明治44年9月	1911年	豪雨により、諫早、大村で死者11名、行方不明者2名、家屋全・半壊52戸、破損275戸、流失16戸、床上浸水370戸、床下浸水253戸、その他堤防、道路、橋、田畑の被害多し。
大正3年8月	1914年	氾濫面積285町、負傷者3名、堤防決壊273ヶ所等の被害を受けた。
大正11年9月	1922年	豪雨(前線)により、諫早の雨量502mm(3日～9日)。被害の状況は不明。
昭和2年9月	1927年	暴風雨(台風)により、本明川が氾濫し諫早は泥海一大修羅場と化す。北高来郡の被害は死者16名、行方不明者1名、住家の全・半壊274戸、流失(一部流失も含む)66戸、住家浸水2,346戸等の被害を受ける。
昭和5年7月	1930年	暴風雨(台風)により、長崎県下で死者47名、行方不明者33名、諫早では、真崎、有喜、本野、小栗小学校の校舎倒壊(洪水:風水害年表)
昭和23年9月	1948年	豪雨(低気圧)により、本明川が氾濫。長崎県下の被害は、死者39名、行方不明79名、家屋の全・半壊99戸、流失64戸、家屋の浸水5,973戸等であった。
昭和24年8月	1949年	暴風雨(ジュディス台風)により、北諫早の雨量(15～17日)320mm。諫早市*の家屋浸水700戸、列車不通。また、海水浸水で農作物の被害甚大であった。
昭和27年7月	1952年	諫早市*で堤防決壊1箇所、家屋浸水118世帯、水稻冠水150町歩。
昭和27年9月	1952年	諫早市*で家屋全半壊3戸、床上浸水88戸、水田冠水146町歩、堤防決壊13箇所。
昭和28年6月	1953年	諫早市*で死者2名、床下浸水92戸、田畑冠水265町歩。
昭和28年7月	1953年	諫早市*で死者2名、家屋全壊2戸、床下浸水92戸、田畑冠水475町歩等の被害を受けた。
昭和29年6月	1954年	諫早市*で床上浸水2戸、床下浸水304戸、田畑冠水914町歩等の被害を受けた。
昭和30年4月	1955年	豪雨(前線)により、諫早市*で床上浸水24戸、床下浸水377戸、田畑の流失・埋没21.5町等の被害を受けた。
昭和31年8月	1956年	暴風雨(台風)により、諫早市*で死者4名、住家全壊86戸、半壊145戸、水田冠水120町等の被害を受けた。
昭和32年7月 (諫早大水害)	1957年	豪雨(梅雨)により、諫早市*で死者494名、行方不明者45名、負傷者1,476名、住家の全壊・流失727戸、半壊575戸、一部破損919戸、床上浸水2,734戸、床下浸水675戸、田畑の流失・埋没、崩壊805町等の甚大な被害を受けた。
昭和37年7月	1962年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で負傷者14名、家屋の全壊流失62戸、半壊25戸、床上浸水2,262戸、床下浸水8,058戸の被害を受けた。
昭和57年7月 (長崎大水害)	1982年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で死者3名、負傷者1名、家屋の全壊2戸、半壊11戸、床上浸水951戸、床下浸水1,457戸の被害を受けた。
平成11年7月	1999年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で家屋の全壊1戸、半壊1戸、床上浸水240戸、床下浸水471戸の被害を受けた。
平成23年8月	2011年	豪雨(前線)により、本明川流域で家屋の床上浸水5戸、床下浸水24戸の被害を受けた。

注) このページの「市町名*」は、平成17年3月1日に行われた県央地区1市5町の合併前の名称にて整理しています。

出典：本明川水系河川整備計画(変更)(平成28年3月)[国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所]